

# 万葉集「ゆゑ（に）」の用法について

馬 紹 華

## 1. はじめに

万葉集において、「ゆゑ」は物事の起こる原因（又は動機）を示す意味で用いられている。その「ゆゑ」の多くが、体言や活用語の連体形を受けて接続助詞のように用いられているということが古語辞書類に記述されている。また、万葉集の「ゆゑ」は格助詞「に」を伴う場合が多く、助詞が付かないものは極めて少ないため、本稿は「ゆゑ（に）」の形を考察対象にして、それが万葉集においてどのように使われているのかを考察する。

まず、「ゆゑ（に）」の前接語について見ると、「ゆゑ（に）」は「故もなく」、「故しもあるごと」のように前接語を伴わないもの、「人妻故に」、「逢はぬ児故に」、「相見し人故に」のように体言を取るもの、「我が故」、「汝が故」のように助詞「が」や「の」を介して体言を取るもの、又は僅かながら「聞きし故に」、「植ゑてし故に」、「かく故に」のように活用語の連体形や副詞に接するものがある。菊澤（1938）は、これらの接続形式をまとめて、上代の「ゆゑ」を（一）独立して用いられるもの、（二）体言＋ゆゑ、（三）体言＋助詞（「が」または「の」）＋ゆゑ、（四）用言＋ゆゑ、の四つに分類している。

「ゆゑ」は体言に接することが多く、橘（1928）は、体言に接する用法を上代「ゆゑ」の“古用”であると述べている。その点に関しては、「ゆゑ」の先行研究は統一した見解に達しているが、一方で、「ゆゑ」の意味用法については諸研究の見解が分かれている。「ゆゑ」は契機・原因を示す意味で、一般的な順接関係を表す場合が多いが、しかし、万葉集においては逆接的な関係を示す場合もある。その場合、逆接として訳された「ゆゑ」が本当に逆接の用法を有するのか否かが議論の焦点になっている。たとえば、

- (1) 紫草のにはほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに（人婦故尔）我恋ひめやも（万葉集 卷一・21）[注1]

の歌について、橘（1928）は、(1) 卷一・21 の「人妻ゆゑに」が「人妻なのにという意と、その人妻の故に」という意と、二つの意を半々に持っている」と述べ、この「ゆゑ」の用法を「順逆中間態」[注2]と名付けている。一方で、西島（1987）は、「恋し

てはならない女性であるのに恋せずにはいられないに解釈した方が妥当であろう」と述べ、「ゆゑ」は逆接の意味を持つものと言っている。これらに対して、吉野（1990）は、『講義』（山田孝雄）、『注釈』（澤瀉久孝）〔注3〕の立場を取って、「人妻ゆゑに」の逆接の訳は、「人妻に恋ふるは不条理なり」というような「第三者の常識」や「理屈」の上に立っての解釈であって、「ゆゑ」の語自体には逆接の用法はないと指摘している。

他に、万葉集の注釈書や古語辞書類を見てみると、積極的に「ゆゑ」の逆接用法を認めるものは少なくはない。たとえば、古語辞書類の「ゆゑ」の項に逆接の用法について、『古語大辞典』（小学館）では、「逆態的に原因や理由を表す。…なのに。…にもかかわらず。」（p.1699）、『角川古語大辞典』（角川書店）では、「逆接的関係を示す。後件に対して矛盾するような前件が契機をなす関係。…なのに。」（p.817）、『上代語辞典』（明治書院）では、「であるのに。なのに。」（p.1047）、『時代別国語大辞典 上代編』（三省堂）では、「契機・原因を示す。一般的な順接関係を表わすほかに、逆接的な関係のくみとられる場合もある」（p.790）、『日本国語大辞典』（小学館）では、「前の事柄に対して、結果としての後の事柄が反対性・意外性を持つ場合、逆接的意味に解される。…なのに。…であるが。」（p.369）などと記されている。

このように、逆接に捉えられる「ゆゑ」については、なお議論する余地があると考えられる。また、後述するように、「ゆゑ」が逆接に解釈される理由に関しても先行研究の指摘は異なっている。そこで、本稿では万葉集に現れる「ゆゑ（に）」の用法について再考察する。

## 2. 先行研究の概観

「ゆゑ」が逆接の用法を持つかどうかについては、逆接に解釈できる例があるから逆接の用法を有すると考える説と、逆接の解釈はあくまでも歌の余情によるものであるから「ゆゑ」本来の用法ではないと考える説で見解が分かれる。本稿はその議論に先立ち、「ゆゑ（に）」が逆接に捉えられる場合のその理由について中心に検討したい。ここでは、それに関する先行研究の指摘を取り上げながら問題点を整理したい。

### 1) 橘（1928）の説

橘（1928）は、歌の構成様式によって「ゆゑ」を「順態」「逆態」「順逆中間態」の三用法に分けて、それぞれの用法の最も主要な構成様式が「体言＋ゆゑ」（順態）、「打消ズ＋体言＋ゆゑ」（逆態）、「（消極的）修飾語＋体言＋ゆゑ」（順逆中間態）であると論じている。特に「逆態」の場合について、「ゆゑ」の前句に打消表現が含まれていることを取り立てて述べている。

しかし、この構成様式による分類では説明できない解釈を持つ歌がある。たとえば、

「朝去にて夕は来ます君故に（故尔）ゆゆしくも我は嘆きつるかも（卷十二・2893）」について、橘氏自身も「意義の上からどうしても逆態の「ゆゑ」と解されるが、構成様式から見れば、順態に属すべきものである」と述べている。

また、橘（1928）では、「打消ズ+体言+ゆゑ」の構成において、「ゆゑ」が逆態になる理由が次のように説明されている。

……此の構成（逆態「打消ズ+体言+ゆゑ」、引用者注）に於ける「ゆゑ」は、かの最も単純なる順態の場合（「体言+ゆゑ」、引用者注）に対して、正にそれと反対の極端に立つものと見做し得る。而して形式の変化は、其の内面に於ける意義の転移に応じて起こる現象と考ふべきであらうから、此の構成形式の場合が、逆態の意義の最も著しい標識であると考へてよきさうに思はれる。

橘氏は、逆態と順態の「ゆゑ」の構成様式が異なる理由を、「ゆゑ」の内面に起きた意味変化だと考えている。つまり、「ゆゑ」が順態から逆態へ意義が転じたから、構成様式が反対になったと解釈している。しかし、この解釈は、なぜ「ゆゑ」の意義が逆態へ転じたのか、その詳細を説明しておらず、十分納得できる解釈だとは言いきれない。

## 2) 日本古典文学大系の説

日本古典文学大系補注では、「ユエが受ける前段の事態から当然予想される結果と相反する事態が後段に現れる場合」（1・二一補注）、「ゆゑ」は逆接の「…だのに」と訳すべきと述べている。(1)の「人妻ゆゑに我恋ひめやも」（卷一・21）の歌を用いて、「人妻という単語だけで、当然、他の人間がそれを恋うてはならないことが示される。従って、自分がその人妻を恋するはずは無いのである。しかも、自分は恋している」と説明し、さらに、こういった場合は「前段の条件文の中に否定のズを含んでいる」と示唆している。

このように、橘（1928）、日本古典文学大系の指摘した通り、逆接に捉えられる「ゆゑ」の前句に打消表現が多く含まれているという特徴が見られる。しかし、なぜそういう構成に逆接の「ゆゑ」が偏在するのか、両者の説明ではいずれ明らかになっていない。

## 3) 吉野（1990）の説

吉野（1990）では、逆接の「ゆゑ」が成立する理由、及びそれが「修飾語句+体言+ゆゑ」の形態に偏在する理由を次のように述べている。

……ただ「修飾語句+体言+ユエ」また「人妻ユエ」の形においてのみ逆的ユエは現れるものであったが、この「体言」「修飾語句+体言」の形態においてモノ

として示されたものを、後件と資格的に同一に句的事態の表現として扱い、そのことによって生じる句的事態の相互関係を対立したものと捉えたり、両事態に因果関係が窺われる場合には、前件を逆的原因と捉えたりすることが逆的ユエを幻出させるのである。「修飾語句+体言+ユエ」の形にこのユエが偏在するのは、右(上、引用者注)のように考えることによってのみ説明が付くものと思われる。

さらに、逆的の「ゆゑ」の前句に打消表現が多く含まれることについて、吉野(1990)は「数は多いものの特別に扱う必要はない」と述べている。

「ゆゑ(に)」の歌において、単純な「体言+ゆゑ(に)」、「人妻ゆゑ(に)」を除いて、すべて前句に修飾語句がかかり、それを句的事態の表現として扱うことは不可能ではないが、しかし、その必要性に疑問を抱く。所詮、逆接関係に解釈される構造は、原因と結果の不一致により生じるギャップが逆接という解釈に繋がるものと見れば良いのであって、逆接関係に解釈される要因を、前件が句的事態として扱われるところに求めなければならない理由はないように思われる。実際、「人妻に恋してしまった」もしくは「人妻なのに恋してしまった」において、「人妻」を句的事態と見なさなくても、順接という解釈も逆接という解釈も可能である。従って、「修飾語句+体言+ユエ」の構成を句的事態として扱うからこそ、逆接の「ゆゑ」がそれに偏在する理由を説明できる、という上記の解釈は不十分であろう。また、前句に多く現れる打消の表現を本当に特別に扱う必要がないのか、についても検討する必要はあるように思われる。

以上、管見の限り、逆接の「ゆゑ」の成立に関する先行研究はまだ十分な成果を達していないのが現状である。先行研究を概観した結果、特に逆接の「ゆゑ」がなぜ「打消ズ+体言+ゆゑ」の構成に偏在するのか、その理由が明らかになっていないことが分かった。本稿はそれに焦点をあてて、「ゆゑ(に)」が逆接に捉えられる論理、及び一つの構成形態に偏在する理由について考察したい。

### 3. 万葉集「ゆゑ(に)」の用法について

万葉集では、「ゆゑ(に)」が含まれる歌が八十五例あり、その中、五例の「ものゆゑ」の歌を除いて、本稿の考察対象となるものは八十例である[注4]。なお、「故もなく」、「故しもあるごと」といった、接続助詞的に用いられていない「ゆゑ」や、数が少なく、訓の問題[注5]もある「聞きし故に」、「植ゑてし故に」のような「ゆゑ(に)」は、本稿の考察対象から除外する。

構成様式による橘氏の分類に関して、形と意味が対応しない場合があることは既述の通りである。本稿では、「ゆゑ(に)」の前接語句が内容によってパターン化する傾向が窺えることに注目し、「ゆゑ(に)」の歌を次の五タイプに分けて、そこから「ゆゑ

(に)」の用法を検討する。

具体的には、「我がゆゑに」や「汝がゆゑに」といった場合の「ゆゑ(に)」は、前接語の体言がすべて人称代名詞であることから、一括して「人称代名詞+ゆゑ(に)」の歌と呼ぶ。また、「はなはだも降らぬ雨ゆゑ」、「いくばくも降らぬ雨ゆゑ」などは「降らぬ雨ゆゑ」の歌、「思ひそ我がする逢はぬ児ゆゑに」、「はしきやし逢はぬ児ゆゑに」などは「逢はぬ児ゆゑに」の歌、「ただ一目のみ見し人ゆゑに」、「おほほしく見し人ゆゑに」などは「見し人ゆゑに」の歌、「人妻ゆゑに我恋ひめやも」や「人妻ゆゑに我恋ひぬべし」、「人妻ゆゑに我恋ひにけり」などは「人妻ゆゑに」の歌、と呼ぶことにする。以後、この順で考察する。

### 3. 1 「人称代名詞+ゆゑ(に)」の歌

このタイプは、次のように「人称代名詞+ゆゑ(に)」の上に i 修飾語句を伴わない歌と、ii 修飾語句を伴う歌、二つの構成形式がある。

i 修飾語句を伴わない「人称代名詞+ゆゑ(に)」の歌：

- (2) 我がゆゑに(和我由恵仁) 妹嘆くらし風速の浦の沖辺に霧たなびけり  
(巻十五・3615)
- (3) 我がゆゑに(和我由恵尔) 思ひな瘦せそ秋風の吹かむその月逢はむものゆゑ  
(巻十五・3586)
- (4) 我がゆゑに(我故) 言はれし妹は高山の峰の朝霧過ぎにけむかも  
(巻十一・2455)
- (5) 浅葉野に立ち神さぶる菅の根のねもころ誰がゆゑ(誰故) 我が恋ひなくに  
(巻十二・2863)
- (6) 我がゆゑに(我故尔) いたくなわびそ後つひに逢はじと言ひしこともあらなくに  
(巻十二・3116)
- (7) 大船の思ひ頼める君ゆゑに(君故尔) 尽くす心は惜しけくもなし  
(巻十三・3251)
- (8) 水底に沈く白玉誰がゆゑに(誰故) 心尽くして我が思はなくに(巻七・1320)
- (9) 大空ゆ通ふ我すら汝がゆゑに(汝故) 天の川道をなづみてぞ来し(巻十・2001)
- (10) 命あらば逢ふこともあらむ我がゆゑに(和我由恵尔) はだな思ひそ命だに経ば  
(巻十五・3745)

ii 修飾語句を伴う「人称代名詞+ゆゑ(に)」の歌：

- (11) ひさかたの天知らしぬる君ゆゑに(君故尔) 日月も知らず恋ひ渡るかも

(巻二・200)

- (12) 朝去にて夕は来ます君ゆゑに (君故尔) ゆゆしくも我は嘆きつるかも  
(巻十二・2893)
- (13) 後れ居て我はや恋ひむ印南野の秋萩見つ去なむ児ゆゑに (去奈武子故尔)  
(巻九・1772)
- (14) 父母に知らせぬ児ゆゑ (不令知子故) 三宅道の夏野の草をなづみ来るかも  
(巻十三・3296)
- (15) 筑紫なるにほふ児ゆゑに (尔抱布児由惠尔) 陸奥の香取娘子の結びし紐解く  
(巻十四・3427)
- (16) うらもなく去にし君ゆゑ (去之君故) 朝な朝なもとなそ恋ふる逢ふとはなけど  
(巻十二・3180)

体言の上に修飾語句を伴わない (2) ~ (10) において、「ゆゑ (に)」は「…のため  
に」、「…のことで」、あるいは「故に」のままに訳されることが多い。この場合の「ゆ  
ゑ (に)」は、前句が後句の順当な原因・理由であることを自ずと解釈されるため、本  
稿ではこれについて言及しない。一方で、修飾語句を伴う (11) ~ (16) においては、  
「ゆゑ (に)」はしばしば「…だのに」と逆接に訳されることが多い。

たとえば、(11) (12) の歌は、『全注釈』では「神となって天をお治めになった君で  
あるものを、日月の過ぎるも知らないで、恋ひつつ過すことである」、「朝になれば行  
って、夕方においでになるあなただのに、わたくしは歎息したことよ」と訳されており、  
「ゆゑ (に)」は逆接に解釈されている。また、『評釈』、『私注』のように、(11) を順  
接に、(12) を逆接に解釈するものもある。さらに、『新全集』では、逆接に捉えられ  
る「ゆゑ (に)」について、「ユエ (二)」は本来、原因・理由を表し、順接的な続き方  
をするが、前後の文脈によって逆接と解されることがある。特に、すぐ上の名詞にかか  
る連体修飾格が長ければ長いほど、逆接性が強まる傾向が認められる」と解説されてい  
る。しかし、なぜ連体修飾格が長ければ長いほど、逆接性が強まる傾向があるのかにつ  
いては説明されていない。

このように、体言の上に修飾語句を伴う (11) ~ (16) の歌の「ゆゑ (に)」を順接  
に解釈する説はあるものの、冒頭の高語辞書類や多くの注釈書は逆接と捉えている。つ  
まり、修飾語句がない「ゆゑ (に)」の歌は順接にしか訳せないのに対して、修飾語句  
がある「ゆゑ (に)」の歌は逆接に訳せる余地があることになる。構成上両者の違いは  
上に修飾語句が付くか付かないかということだけであり、逆接に捉えられる理由はやは  
り前句にあるものと考えられよう。これについて、「ゆゑ (に)」の歌にさらに触れて  
から考察したい。

### 3. 2 「降らぬ雨ゆゑ」の歌

万葉集において、「はなはだも降らぬ雨（雪）ゆゑ」の歌は下記の四例である。これらの歌は雨や雪に寄せて思いを譬える譬喩歌である。「はなはだも降らぬ雨（雪）」は「たいして逢っていない」ことを譬え、「庭の水」や「空の雲」、「滝の音」は「噂の高い」ことをいう[注6]。つまり、「はなはだしく降っていない雨（雪）なのに、庭の水が大げさに流れるな（空いっぱい雲が広がる）」という表現は、「たいして逢っていないのに、噂が高いことよ」という実情を譬えているのであり、その点に歌の本意がある。

- (17) はなはだも降らぬ雨ゆゑ（不零雨故）にはたつみいたくな行きそ人の知るべく  
（巻七・1370）
- (18) はなはだも降らぬ雪ゆゑ（不零雪故）こちたくも天つみ空は曇らひにつつ  
（巻十・2322）
- (19) いくばくも降らぬ雨ゆゑ（不零雨故）我が背子がみ名のこごたく滝もとどろに  
（巻十一・2840）
- (20) はしきやし吹かぬ風ゆゑ（不吹風故）玉櫛筒開けてさ寝にし我そ悔しき  
（巻十一・2678）

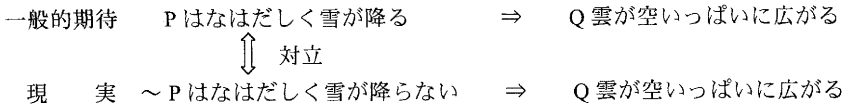
万葉集注釈書の解釈を見てみると、『全注釈』、『旧大系』、『新全集』ではすべて上記の「ゆゑ」を逆接に捉えているのに対して、『私注』では(17)(18)(20)を順接に、(19)を逆接に解釈し、『評釈』では(17)を順接に、(18)(19)(20)を逆接に解釈していることが分かる。(17)～(20)の歌は明に内容にも構成にも類似するにもかかわらず、『私注』、『評釈』はなぜ正反対の異なる解釈をするのか、特に理由が記されていない。本稿では、上に述べた歌の本意が「しばしば逢っていないのに、世の噂は騒がしい」ことにあると見て、これらの歌を一貫して逆接に訳しても差し支えないものとする。

橘(1928)が指摘した、逆接の「ゆゑ(に)」が偏在する「(打消ズを含む)修飾語句+体言+ゆゑ(に)」という構成において、「降らぬ雨ゆゑ」の歌はその典型的な例である。修飾語句が付かない「ゆゑ(に)」が順接にしか解釈されず、修飾語句が付く「ゆゑ(に)」が逆接に解釈されやすいことを前にも触れたが、それに関連して「ゆゑ(に)」が逆接に捉えられる理由は前句の打消表現を含む修飾語句にあると推定し、その逆接の論理を次のように考える。

一般的期待[注7]では、「はなはだしく降る雪」が原因で、「雲が空いっぱい広がる」事態が生じたと考えるのが普通であるが、しかし、「はなはだも降らぬ雪」はそうした一般的期待を否定している。すなわち、現実の前句では「はなはだしく雪が降らなかつ

た」とされるにもかかわらず、後句では「雲が空いっぱい広がる」という事態が生じたことが述べられているのである。ここにおいて、一般的に「前句は P であれば、後句は Q である」という期待が持たれる文脈で、現実には「前句は～P であったが、後句は同じく Q である」という事態が発生している、という構造が見て取れる。この構造を図で示すと、次の通りになる。

図 1. 「降らぬ雨ゆゑ」の歌 ((18) 卷十・2322)



このように、一般的期待と現実においては、前句の内容が対立するにもかかわらず、後句の事態は同じ結果になる。そのため前句の表す事柄と一般的期待との間にギャップが生じ、「ゆゑ(に)」に逆接の解釈が生じるものと考えられる。また、修飾語句に含まれている打消の表現は、一般的期待における肯定的な前句を打消す形になっていると考えられるのではなからうか。

以上で分析した逆接の「ゆゑ(に)」の構造は、「逢はぬ児ゆゑに」、「見し人ゆゑに」、「人妻ゆゑに」の歌にも適用できる。次にそれらの歌について触れたい。

3. 3 「逢はぬ児ゆゑに」の歌

「はなはだも降らぬ雨ゆゑ」と同様に、「逢はぬ児ゆゑに」の歌も逆接の「ゆゑ(に)」の典型的な構成を持つ歌である。

- (21) ……昼はも 日のことごと 夜はも 夜のことごと 立ちて居て 思ひそ我が  
する 逢はぬ児ゆゑに (不相児故荷) (卷三・372)
- (22) 相思はずあるらむ児ゆゑ (将有児故) 玉の緒の長き春日を思ひ暮らさく  
(卷十・1936)
- (23) 行けど行けど逢はぬ妹ゆゑ (不相妹故) ひさかたの天露霜に濡れにけるかも  
(卷十一・2395)
- (24) はしきやし逢はぬ児ゆゑに (不相子故) いたづらに宇治川の瀬に裳の裾濡らし  
つ (卷十一・2429)
- (25) 相思はぬ人のゆゑにか (人之故可) あらたまの年の緒長く我が恋ひ居らむ  
(卷十一・2534)
- (26) はしきやし逢はぬ君ゆゑ (不相君故) いたづらにこの川の瀬に玉裳濡らしつ



(卷十一・2705)

(27) すずき取る海人の灯火外にだに見ぬ人ゆゑに (不見人故) 恋ふるこのころ

(卷十一・2744)

これらの歌において、体言の上にある修飾語句は殆ど「逢はぬ」、「相思はぬ」、「見ぬ」といった表現である。つまり、「逢ってくれない (思ってくれない) 人に、年月長く恋い焦れる」という歌の内容が殆どである。「ゆゑ (に)」の解釈については、「降らぬ雨ゆゑ」の歌と同じように、もっぱら逆接で捉える注釈書(『旧大系』)もあれば、全てを逆接で捉えるのではなく一部の歌を順接で捉える注釈書もある。たとえば、『評釈』では(22)を、『全注釈』では(24)(26)を逆接に解釈している。本稿ではこれらの歌の本意が殆ど同じであることを根拠に、上記の歌における「ゆゑ (に)」をすべて逆接で捉えてもよいと考えている。『旧大系』でもすでにそう解釈されており、再検証する必要はなからう。「ゆゑ (に)」の逆接構造は前節で分析した通り、次のようになる。

図2. 「逢はぬ見ゆゑに」の歌((21) 卷三・372)

一般的期待	P 逢ってくれる人に	⇒	Q 激しく物思いをする
	⇕ 対立		
現 実	～P 逢ってくれない人に	⇒	Q 激しく物思いをする

これも同じ論理で逆接の構造を説明できると思われる。つまり、一般的には、「逢ってくれる人に、激しく物思いをして恋い慕う」のが普通であるが、しかし、現実には「逢ってくれない人に、昼も夜も立ったり座ったり落ち着かず激しく物思いをした」わけであり、そこにおいて一般的期待と前句の間にギャップが生じ、「ゆゑ (に)」に逆接の解釈を派生させているのである。

確かに、「逢ってくれない人であるために、長い年月恋い慕った」のように、順接と解釈することは不可能ではない。しかし、逆接と捉えている注釈書が敢えて逆接の解釈を取る理由は、「通常、恋の相手になり難い人に恋してしまった」ということを表現する点に、歌の趣があるからではないだろうか。さらに、先行研究で示唆されるように、逆接の「ゆゑ (に)」は打消表現を伴うという特徴が見られ、これらの歌はその条件に満たしてもいる。よって、(21)～(27)も他の歌と同様に逆接と理解したほうが自然であろう。

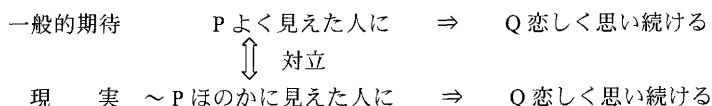
### 3. 4 「見し人ゆゑに」の歌

「見し人ゆゑに」の歌には、修飾語句に直接的な打消の表現が含まれていないが、しかし、下記の歌が示すように、「一目のみ」、「ほのかに」、「おほほしく」（ぼんやりと）といった表現自体が否定的な意味合いを帯びていると見ることができる。

- (28) 朝霧の凡に相見し人ゆゑに（人故尔）命死ぬべく恋ひ渡るかも（巻四・599）  
 (29) はだすすき穂には咲き出ぬ恋を我がする玉かぎるただ一目のみ見し人ゆゑに（視之人故尔）（巻十・2311）  
 (30) 朝影に我が身はなりぬ玉かきるほのかに見えて去にし児ゆゑに（去子故）（巻十一・2394）  
 (31) 花細し葦垣越しにただ一目相見し児ゆゑ（相視之児故）千度嘆きつ（巻十一・2565）  
 (32) 夕月夜暁闇のおほほしく見し人ゆゑに（見之人故）恋ひ渡るかも（巻十二・3003）  
 (33) かくしてそ人の死ぬといふ藤波のただ一目のみ見し人ゆゑに（見之人故尔）（巻十二・3075）  
 (34) 朝影に我が身はなりぬ玉かきるほのかに見えて去にし児ゆゑに（往之児故尔）（巻十二・3085）（重出、巻十一・2394）

これらの歌についても、諸注釈書の解釈が一貫性に欠けているという問題はあるが、「逢はぬ児ゆゑに」の歌と同様に、歌の本意は「ただ一目だけ逢った人なのに、死ぬほど恋しく思い続ける」ことであると推定されるため、よってこれらの歌も逆接に理解できると考えられる。詳細な分析は省くが、逆接の構造のみを次に示す。

図3. 「見し人ゆゑに」の歌（(28) 巻四・599）



### 3. 5 「人妻ゆゑに」の歌

「人妻ゆゑに」の歌は、万葉集の諸注釈書において最も多く議論されている歌である。歌の中で「人妻」であることを明記したものの他、「人の児」のように婉曲に表現したものがある。『注釈』（澤瀉久孝）で「人の子は実質においては人妻と認めてさしつかえない」という記述があるのに従い、本稿では「人妻ゆゑに」の歌と同様に扱うことにする。

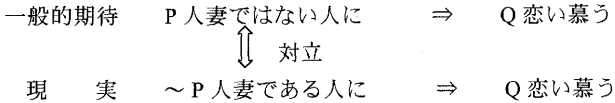
- (35) 紫草のにはへる妹を憎あらば人妻ゆゑに（人孀故尔）我恋ひめやも  
（卷一・21）
- (36) 大船の泊つる泊まりのたゆたひに物思ひ瘦せぬ人の児ゆゑに（人能児故尔）  
（卷二・122）
- (37) 赤らひく色ぐはし児をしば見れば人妻ゆゑに（人妻故）我恋ひぬべし  
（卷十・1999）
- (38) うちひさす宮道に逢ひし人妻ゆゑに（人妻妬）玉の緒の思ひ乱れて寝る夜しそ  
多き（卷十一・2365）
- (39) 海原の路に乗りてや我が恋ひ居らむ大船のゆたにあるらむ人の児ゆゑに  
（人児由恵尔）（卷十一・2367）
- (40) 千沼の海の浜辺の小松根深めて我恋ひ渡る人の児ゆゑに（人子妬）  
（卷十一・2486）
- (41) 駿なき恋をもするか夕されば人の手まきて寝らむ児ゆゑに（将寐児故）  
（卷十一・2599）
- (42) あしひきの山川水の音に出でず人の児ゆゑに（人之子妬）恋ひ渡るかも  
（卷十二・3017）
- (43) 篠の上に来居て鳴く鳥目を安み人妻ゆゑに（人妻妬尔）我恋ひにけり  
（卷十二・3093）

「人妻ゆゑに」の「ゆゑに」について、『講義』、『注釈』は逆接の解釈は歌の意から推し量ったもので、正当に「ゆゑ」の意を訳したのではないと主張している。『講義』、『注釈』の解釈は「ゆゑ」という語自体が逆接用法を持つことは否定しているが、上記の歌を逆接に解釈することを認めている。他に、『評釈』、『全注釈』、『旧大系』、『新全集』の解釈も、これらの歌の「ゆゑ」を逆接として捉えている。

西島（1987）は、大伴脚の歌「神木にも手は触るといふをうつたへに人妻といへば触れぬものかも（万葉集巻四・517）」を通して、「人妻に触れることは神木に触れることと同様に、いやそれ以上の禁忌であった」ことを指摘している。つまり、これらの歌は「人妻という決して恋してはならない女性に、恋してしまった」という本意を持つものと言え、その点から考えればこれらの歌の「ゆゑ（に）」は逆接で解するのが妥当と言えよう。

また、「人妻ゆゑに」の歌には打消表現を含む修飾語句がないが、「人妻」という表現自体が「恋してはいけない」女性であることを暗示しており、このように否定的なニュアンスが含まれている点は他の歌と同様に捉えられる。よって、「人妻ゆゑに」の歌の逆接の構造は次のように表示できる。

図4. 「人妻ゆゑに」の歌 (43) 卷十二・3093)



このように、本来恋してはいけない相手が恋の原因となるという点に生じたギャップによって、「ゆゑ (に)」は逆接に訳されるわけである。以上、本稿では前句の内容によって「ゆゑ (に)」を分類することを試み、逆接に解釈される理由を図1～図4に示す統一した論理的構造によって説明できることを示した。

本稿では、繰り返し述べたように、前句が打消を含む修飾語句を伴うことで、前句に逆接のギャップが発生するものと判断してきた。一方で、冒頭で述べた『旧大系』の解釈の通り、「前段の事態から当然予想される結果と相反する事態が後段に現れる」、つまり、「自分が人妻を恋するはずがない」が、現実には「恋してしまった」のように、ギャップの焦点が後句にあるという考え方で逆接の解釈を捉える立場がありうることも想定される。簡単に言えば、一般的には「Pであれば、Qである」はずだが、実際には「Pであるのに、～ Qである」という考え方である。逆接の構造として、この考え方も成立すると思われるが、具体的に「人妻ゆゑに」の歌の内容と合わせてみると、現実にはすでに恋をしてしまっているわけであって、問題は恋をしないことではなく、恋してはいけない女性に恋してしまったこと、即ち、恋の相手が人妻であることが問題になっているのではなからうか。従って、「ゆゑ (に)」が逆接に解されるときの焦点は前句にあると考えるべきであろう。

4. おわりに

本稿は、万葉集の「ゆゑ (に)」が逆接に捉えられる理由について考察を行った。そして、先行研究では明らかにされていない、逆接の「ゆゑ」が「(打消ズを含む) 修飾語句+体言+ゆゑ (に)」の構成に偏在する理由について検討を試みた。

所詮、逆接に捉える条件構造(対立関係を除いて)は、「後句が、前句から順当に導かれる結果と相反する」か、「前句が、後句を引き起こすのに相応な条件ではない」か、のどちらかである。本稿では、「ゆゑ (に)」の逆接構造は後者の方であり、前句に逆接の焦点があると考えている。その理由として次の二点が挙げられる。

一つは、逆接の「ゆゑ (に)」に打消表現を含む修飾語句(もしくはそれに相当する体言)が伴っていることである。その打消表現は、体言を修飾すると同時に、本来後句事態の原因・理由となり得る事態を打ち消すことで、前句を後句事態の原因・理由になりにくい条件として提示する効果があると思われる。その意味で、前句に打消表現が現

れることは、ギャップの焦点が前句にあることを示しているように見える。

もう一つの理由は、歌の内容に注目すると、後句の出来事はすでに発生した事態であり、それが実現しないという前提に立つことはできない。繰り返しになるが、「人妻ゆゑに」のような歌では、「恋してしまった」ことは事実であって、「人妻に恋しない」ことではなく、恋の相手が「人妻」であることが問題になると思われる。よって、以上の二つの理由を持って、「ゆゑ(に)」が逆接に捉えられるギャップの焦点は前句にあると言えよう。

[注]

- 1 万葉集の「ゆゑ(に)」の歌番号と訓読は『新編日本古典文学全集』(小学館)に従う。
- 2 橘(1928)の「順逆中間態」に関する詳細な記述を、以下に引用する。

右の例(1)の歌、引用者注)に於ける「ゆゑ」は、先注どもに「なるものを」と言ひ換へられて居るものであるが、よく味つて見ると、もはや特に「なるものを」など言ひ換へなくとも、「ゆゑ」そのまま理解せられる程度の順逆両態中間のものである。この程度の「ゆゑ」の用例は近世若くは現代までも存してゐる。「金ゆゑ大事の忠兵衛さん、科人にしたも私から」(戀飛脚大和往來)の「ゆゑ」の如き、たかゞ金の問題に過ぎないのといふ意と、その金の故にといふ意と、二つの意を半々に持つてゐること、「人妻ゆゑに」などの場合と同じであると思ふ。

- 3 本稿では、万葉集の注釈書を次のような略称で示す。『萬葉集講義』(山田孝雄)を『講義』、『萬葉集評釈』(窪田空穂)を『評釈』、『萬葉集注釈』(澤潟久孝)を『注釈』、『萬葉集全注釈』(武田祐吉)を『全注釈』、『萬葉集私注』(土屋文明)を『私注』、『日本古典文学大系』(岩波書店)を『旧大系』、『新編日本古典文学全集』(小学館)を『新全集』、『新日本古典文学大系』(岩波書店)を『新大系』と呼ぶ。

- 4 『万葉集』の歌に関してはCD-ROM版『国歌大観』(角川書店)を用いて調査を行った。なお、拙稿(2014)で述べた通り、「ものゆゑ」は他の「体言+ゆゑ」の形と比べ、独立した一語と見なされているため、本稿では「ゆゑ(に)」の歌から除外した。

- 5 CD-ROM版『国歌大観』を用いて検索した結果、万葉集において、活用語や副詞に接続する「ゆゑ(に)」の歌は次の四例しかない。

- ・三輪山の山辺ま麻木綿短木綿かくのみ故に(如此耳故尔)長くと思ひき(巻二・157)
- ・かくゆゑに(如是故尔)見じと言ふものを楽浪の旧き都を見せつつもとな(巻三・305)
- ・我妹子がやどの橘いと近く植ゑてし故に(殖而師故二)成らずは止まじ(巻三・411)
- ・白玉は緒絶えしにきと聞きし故に(聞之故尔)その緒また貫き我が玉にせむ(巻十六・3814)

橘(1928)、菊澤(1938)では、この四例は「ゆゑ(に)」の歌と見なされていない。また、井上(1959)では、巻二・157の歌について、万葉集の注釈書『略解』、『口訳』、『全釈』、『新訓』、『全注釈』では「カラ」と訓んでいることを指摘している。よって、本稿は、このように訓が明確ではない歌を扱わないことにする。

6 (20) 卷十一・2678 の歌について、『新全集』の解説には、「蒸し暑い夜、風を入れると称して、本心は男の来るのを待って戸を開けたまま寝たのであろう」という記述がある。これにより、(20) の歌は噂を警える歌ではないが、(17) ～ (19) と同じく譬喩歌と考えられよう。

7 本稿では、井島 (1996) における「期待」という概念を応用する。井島 (1996) では、「期待」とは「予想・思い込み・希望など言語主体の心的世界に生じる内容」を総称したものとされている。本稿では、言語主体の持つ常識も、期待に含めて考える。

〔参考にした辞書類〕

中田祝夫他編 (1983) 『古語大辞典』小学館／中村幸彦他編 (1982 - 1999) 『角川古語大辞典』角川書店／上代語辞典編集委員会 (1967) 『時代別国語大辞典 上代編』三省堂／丸山林平 (1967) 『上代語辞典』(明治書院)／日本国語大辞典第二版編集委員会 (2000 - 2002) 『日本国語大辞典』小学館

〔万葉集注釈書〕

山田孝雄 (1932) 『萬葉集講義』實文館／窪田空穂 (1943) 『万葉集評釈』東京堂／武田祐吉 (1956 - 1957) 『萬葉集全注釈』角川書店／澤瀉久孝 (1957 - 1977) 『萬葉集注釈』中央公論社／土屋文明 (1969 - 1970) 『萬葉集私注』筑摩書房／『日本古典文学大系』岩波書店／『新編日本古典文学全集』小学館／『新日本古典文学大系』岩波書店

〔参考文献〕

- 橘 純一 (1928) 『「ゆゑ」の古用について』『国語と国文学』5 - 11  
橘 純一 (1929 a) 『「ものゆゑ」といふ語の意義について (一)』『国語と国文学』6 - 11  
橘 純一 (1929 b) 『「ものゆゑ」といふ語の意義について (二)』『国語と国文学』6 - 12  
志村健雄 (1931) 「萬葉集『ゆゑに』の解』『国学院雑誌』37  
菊澤季生 (1938) 「古代に於ける『ため・ゆゑ・から』』『文學』6 - 5  
富田大同 (1958 a) 「寝なへ児ゆゑに』『解釈』4 - 7  
富田大同 (1958 b) 「再び『寝なへ児ゆゑに』』『解釈』5 - 5  
井上富蔵 (1959) 『「わがゆゑに」と『わがからに』の考察—万葉集語法の研究—』『岡山大学法文学部 学術紀要』11  
生野浄子 (1960) 『「ため』『ゆゑ』の意味変化に就いて』『国語国文学會誌』5  
西島恵美子 (1987) 「人妻ゆゑにわれ恋ひめやも』『成城国文学』3  
吉野政治 (1990) 「人妻ゆゑに一逆的に訳されるユエについて—』『萬葉』137  
井島正博 (1996) 「期待の表現機構』『成蹊国文』29  
馬 紹華 (2014) 「古代語『ものゆゑ』と『ものから』の意味変化について』『日本語学論集』10

(ま しょうか 大学院人文社会系研究科 博士課程 2年)